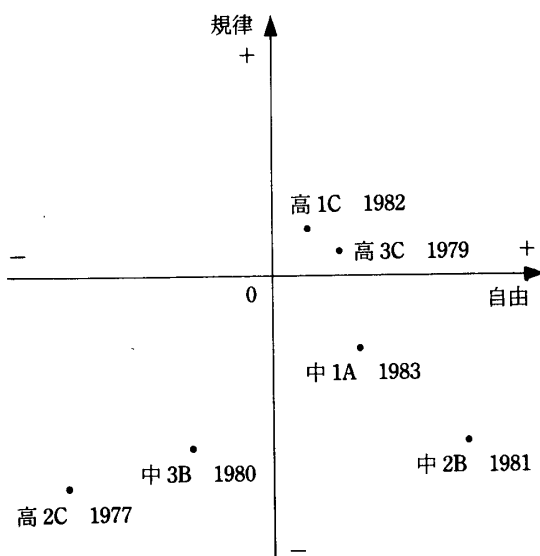


学級経営実践報告 (I)

川田 基生

1 はじめに

高 2C (1977 年度), 高 3C (1979 年度), 中 3B (1980 年度), 中 2B (1981 年度), 高 1C (1982 年度), 中 1A (1983 年度)。昨年の中 1 の学級担任で、筆者は中高 6 学年の担任を一通りやったことになる。



たて軸に規律、よこ軸に自由をとり、自分のクラスを自己採点で位置づけてみた。自由も規律もない暗く混乱したところから出発、原点付近をさまよっている。よこ軸の自由とは、学級内の自由であり、右の方へ行くほど、生徒はいきいきとして個性的となる。生徒が変る学級空間となっていること。親友のできる、そして、生徒が今までやれなかったことが級友の暖かい応援の中で、やれるようになる、そんな集団の雰囲気があれば、そのクラスは、上のグラフ上で右端に位置づけられる。

たて軸の規律とは学級内の規律であり、上の方へ行くほど、生徒は義理がたくなり、対人関係の作法を体得してゆく。規律というと、プロイセン風、鉄の規律を想いがちであるが、学校では、規律を説くことは世間に生きる上での義理を説くことと考えてみてはどうだろうか。

学級経営で、筆者は上のグラフの右の、はるか上方に、自律による自由の学級共和国を目ざしたわけでは

ない。現在の、45 人の学級と担任という制度で、満足のゆく結果が得られるかどうかは疑問としなければならぬ。しかし、無為無策であったがために荒れてしまったあのクラス、このクラス、自分の担任したクラスを思い出す時、担任というのは、全身全霊、渾身の力であらねばならない大きな仕事と思えてくる。

2 アノミックな状況

アノミックとは、政治学の用語で無規則な、とでも言い換える。学校社会は少しずつアノミックになっているのではなからうか。

教師になったころ、林間学校へ付き添ってびっくりした。バスから降りて、白樺の木立ちの中で開校式。担任の教師が「すわりなさい」と言っても半数近い生徒は立ったままだった。

昨年、11 月、静かに教室で授業が進んでいる時、突然黒板側の入口から中 3 の本校生徒 A 君が入ってきた。異様な笑いをうかべて一瞥すると背をかがめ、奇妙な格好で生徒の間をぬけ、足早に去っていった。あとには何とも言えぬどよめきが残った。A 君、廊下で着がえをしてみせたりしていたが、ついに教室にもはいってくるようになったのだ。A 君は中学 1 年で地元不良にナイフで顔を切られたり、2 年ではオートバイ盗み、家出などくりかえしていた生徒で、上記の事件など、担任の教師の記憶には残っていないほどのことと思われる。

A 君が中 2 のころ、冬の朝だったと記憶している。学校まであと 100 m。通学路で、私の前方 30 m に A 君と友人 1 人が横道からスッと現われ、こちらをちょっとながめ、手にしていたビニル袋を投げすてて、学校の方へかけ出していった。私は、枯れた落葉の中から、ビニル袋をつまみ上げた。透明な液体で、水に似ていた。匂いはなかった。シンナーではない。しかし、みるみる気化してしまった。水ではないような、水だったような。水を袋に入れて見せびらかすことが、どんな意味なのか、私はとまどった。いや、それ以前に、何が起ったのか確定できなかった。

生徒が悪くなったという見方もあるが、筆者は、アノミックになった、と見ている。予測し難い行動。行動定型を失いつつある生徒たちの集団。

3 状況化への教師の対応 ①

教師も、生徒の父や母と同じ人間であることを知らせる。

1977年、筆者は初めて担任となった。高校2年生の時、他校生と暴力事件をおこし、1年時の担任が会議で退学を提案、圧倒的多数で否決。ただ、「次に事件を起こしたら退学」との条件がつき、日付を抜いた退学届を学校に出させることになった。

四月の始業式、私はB君を大そうじの時間、宿直室に呼んで言った。

「オートバイを私にあずけなさい。」

「なんで オメーに。」

当時、本校ではオートバイは禁止になっていなかった。予想外に荒れた応答に失望したが、当時の私は、B君を一番心配しているという自負があり、Bもその点わかっているはずだ、と確信していた。

退学届のことが毎日気になっていた。ある日、Bは目のまわりを青黒くして登校してきた。

「どうしたんだ。」

「おやじになぐられた。」

「どうして？」

「おやじを投げとばしたからだ。」

秋になり、三泊四日の修学旅行。行先は萩、津和野。萩では豪華なホテルに泊った。各階の階段付近には、ソファがおいてあり、男子生徒がたむろしていた。視線が私の方に集まった。Bが背後から来て、私の後頭部あたり目がけて、足をふり上げてみせている。シュツ、シュツと、私は後頭部に風を感じた。

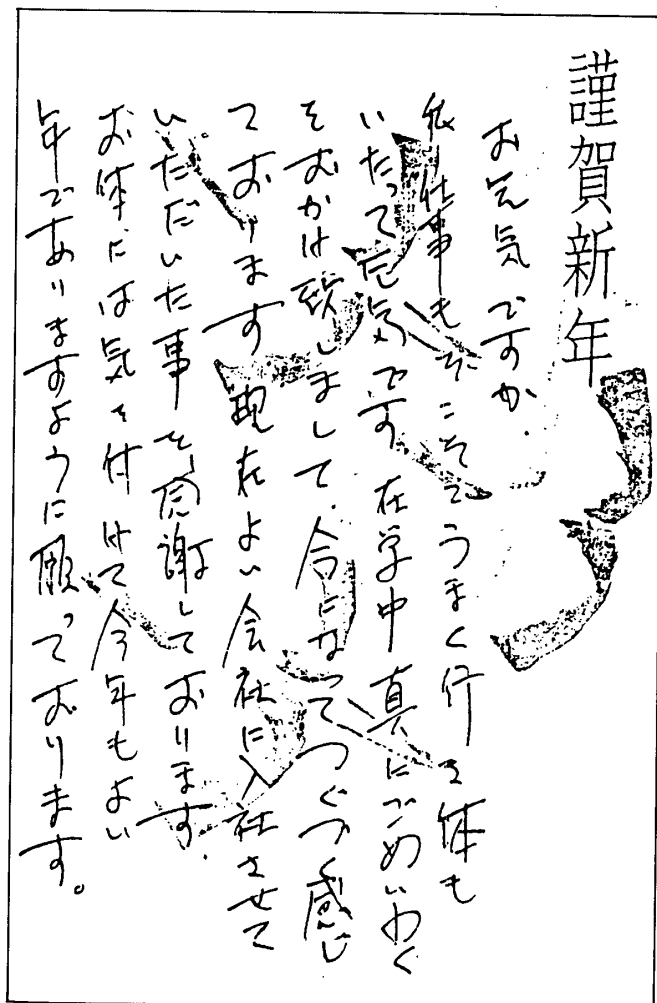
私の思いいれとは別に、私はBからも、まわりの男子生徒からも、人間、彼らの父や母と同じ人間とは見られていない、そんなことに気がついた。そして、荒れる状況では、私ばかりでなく、多くの教師が人間あつかいされていないことに気づいた。

修学旅行の帰りの列車内でB君は事件をおこしてしまった。退学となる可能性のある会議の前日、私はB君の家を訪れた。玄関に土下座して泣き狂う母は、

「先生、成績が落ちちゃって……」と言った。

「建設業で、今景気が悪い」とも言っていた。

B君は卒業式の日も、式が始まる前まで赤いジャンパーを着て、喫茶店でタバコをすっていたという。大学には行かず、筆者の世話で就職した。



卒業後しばらくして、B君の父が癌でなくなったことを聞いた。

あの時期のB君の家は、父の死を目前にした絶望が支配していた、と今は判断している。なぜ中3のころ成績優秀だったB君が高3では最下位のあたりになっていたのか。なぜ就職したのか。なぜ景気が悪いのに親はオートバイを買い与えたのか。そう判断すれば、共感できる。という以上に、こちらの勝手な思いいれで、B君を追いつめていたことが悔まれる。

上の葉書は、卒業後5年、B君のはじめてくれた年賀状である。

次のページの学級通信は、生徒からも、両親からも悲しいこともつらいことも話し合える人、と思ってもらえる教師であろうとして書いたものの一例。

昨日の欠勤について 生徒諸君へ

昨日は突然の半ドンでしたが ゆっくりできましたか。

私は、^{おば}伯母の葬式参列のため学校を休みました。伯母の家は大須にあり、そこは私の生まれた家なので、そこで ^{つや}お通夜、北区のお寺で告別式、八事でお火葬。お昼ごろ八事にいました。帰りのSTくらい行こうかなどとふらふらと44人のことを思い、伯母のことを想いだし、やはり ^{つひ}追憶の方になりました。

私が小学生だったころ、一うちが東京、久々原にあり、伯母が時々訪ねてきて、デパートなんかにつれて行ってくれた。お目当ては、おもちゃ、遊具と文房具。そして屋上近くの食堂に行くこと、それが今から思い出しても、そのころもワクワクするほど楽しかった。私は母とデパートに行くより大須の伯母と行く方が好きだった。何となくも気まえがいい人だった。買い物についての伯母の考えは「財布を落したと思わぬこと」であった。母はその点、しぶかったし、子として苦労もわかるのだが、ほんと、最高のものを買ってくれた伯母との買い物は楽しかった。また、ヒョウカビカの筆箱をもらうのはうれしいが、クラスで誰も持っていないのを学校に持っていくのは、何か先生や他の子に引越めたい感じがした。

葬式に集まった人々から、伯母についていろいろ聞いた。人の評価は棺を蓋

いて定まると言われるが、通夜の晩から、きのうまで はじめて知る事があまり多かった。医専に行っていた一人息子の昭男さんを戦中、失ったこと、若いころ父を失ったことなど、一つ一つあまりに悲しかった。2日つづきのお通夜で、火曜の夜は寒かった。私は父も夫も子も失って、女手一つで戦後三十五年生きていた伯母の不幸を想った。伯母は私に何も言わなかった。こんな寒い夜も、あの人はここにひとりでおわっていた。父母を眠らせて、明け方まで私は一人で寢る中、伯母のことを考えていた。そして、私は、デパートの食堂で、アイスクリームをたべているとき、伯母もすいぶん楽しかったということを感じた。

3 状況化への教師の対応 ②

[ナンビクワラ族首長]

- A 「ウリカンデ」と呼ばれている。意味は「統一するもの」または「一緒につなぎあわせるもの」。
- B 同意が権力の根源。同意があるから首長。
- C 首長は、ただうまくやるだけでなく、他の集団よりもうまくやるよう努力しなければならない。そのことを集団は首長に期待している。
- D 器用である。知的な面で気前が良い。物事を率先して巧みにやってみせる。
- E 群れの人々の気晴しになり、上手に歌ったり踊ったりできる陽気な男。
- F 定住生活をはじめる時期と場所を決める。様々な必要と季節の変動に応じてあらゆる仕事を指揮する。
- G 第一の妻は普通の結婚で一人の妻がもっている通常の役割を演ずる。副妻たちは、より若い世代に属している。第一の妻は彼女たちを娘と呼ぶ。首長の重い仕事の時、副妻たちは彼について行き、手を貸したり、励ましたりする。男の子のように振舞うこの娘たちは集団の中で最も美しく最も健康的な娘のうちから選ばれる。首長は彼女たちと友達同士のような態度で生活を共にする。首長一人きりだったならば、他の人たち以上のことをするのは極めてむずかしいであろう。

[うまくやっていた隣の担任]

- A すぐれた組織をつくりあげる人。
- B 強圧的、武断政治とうつつる場合でも生徒を同意させている。
- C コンクールなどは必ず勝ちにいく。筆者などは「三位か四位で目だたなくやろう」と言っているが生徒は「優勝しよう」と言うまで納得しない。
- D 教育実習に来た本校出身の大学生は、昔の担任の先生(家庭科)に「中3の時、先生が二次方程式を解いてみせてくれた時から、本当に尊敬ははじめました。」と言っていた。
- E 卒業生に、6学年の担任の中で誰が一番よかったか聞きました。「T先生。あの先生は日頃は紳士ですが、林間学校では、トイレトパーパーふりながら、かわいい魚屋さんを歌うのです。それがすごくいいのです。」
- F 生徒にとって、どんな仕事を、どのようになど、いつ、どこで、誰が、何を、がはっきり示してある。
- G 筆者には欠けていて、有能な担任教師に共通する特徴は、2つある。疲れを知らないタフな行動と、女子生徒の使い方がうまいこと。しかしこの2つは、左のレヴィ＝ストロース「悲しき熱帯」のナンビクワラ族の首長と副妻についての記述から考えると、1つのことと思えてくる。45人の生徒の担任であることの心労の激しさ、徒労とも思える雑用の多さは、スポーツ的な体力だけではささえきれない何物かがある。女子生徒の笑いさざめきにつつまれる形ですすめると疲れにくい、ということだろうか。

4 おわりに

以上、7項目、担任として、教師は何をしたらよいか、観察し、実行してみて、手ごたえのあることを、比較の形で列挙してみた。経験の深い人から教えてもらったことは多い。しかし、何かいいものがある、と思えたら、生徒、特に副室長をやっていた女子生徒に聞いてみるのもいい。

「先生、レクやろ。」

「ぼくはレクにが手だ。」

「先生、レクやろ。」

「M先生の学活の時間は毎週レクで、レクをやるたびに、みんな仲よくなっていった。」

学級がまとまっていくような構造をもったレクリエーションが存在する。調べてみる。その類の文献が見つかる時もある。自分でもやってみる。筆者の号令で、生徒がいきいきと必死でレクリエーションをはじめる時が、何回かの失敗の後、やってくる。M先生のほどおもしろくないにしても、生徒の楽しそうな表情が私のホイッスルの後につづくのを見るのは、やはり楽しい。